

禁断の裏名盤ワールド

若杉実の裏口音学

表が裏で、裏が表!?

72

若杉 実: 足利出身の音楽ジャーナリスト。雑誌への寄稿、連載をはじめCDのライナーノーツを執筆、CD、DVD企画も200タイトル以上手がける。RADIO-i(愛知国際放送)、Shibuya-FMなどラジオのパーソナリティも担当していた。著書に「渋谷系」「東京レコ屋ヒストリー」「裏ブルーノート」「裏口音学」、新刊「ダンスの時代」。

ご意見などはブログ&メールまで。
http://wakasugim.jugem.jp/
wakasuginoru@hotmail.com

ケンちゃん“ミュージシャン”(研ナオコ)



たかはしあきひこ&エレクトリック・シェーパース「ヒゲ」のテーマ (SMS)

新型コロナの犠牲になった志村けん(3月29日逝去)。その三日後に放送された「志村けんさん追悼特別番組」。番組終盤になって加藤茶が読みあげた弔辞が後日話題となったが、個人的にツボだったのが、開始早々ゆかりのゲストとして研ナオコにマイクが渡されたとき、彼女がしれっといった一言。「(スタジオに流れてる)BGMがよくないね。ケンちゃんは“ミュージシャン”なんだから」

この瞬間スタッフ一同、凍りついただろうな。緊急放送で局はお株をとったつもりだったのだろうけど、まさかその「緊急」が裏目に出ようとは。ドリフをのぞく、ゲストは彼女と石野陽子だけ。えらい地味だとも思ったけど、研ナオコの第一声で、なにかが弾けて画面が明るくなった。

それにつけても、いくつもの修羅場をくぐってきた芸能人の発言力はちがう。彼女がどんなBGM

を望んでいたのかわからないけど、「ケンちゃんは“ミュージシャン”」というのは志村の本質をついた分析だとも思う。これが「ケンちゃんは音楽にこだわってる」なんてものなら、おもしろくもなんともない。プライベートでも愛車ロールスロイスのカーステから最新の音楽を流していたという話はよく耳にするが、研ナオコの発言のレベルはそこからはるかに遠く高い。志村の音楽遍歴、バンドから始まったドリフの歴史云々といったご託を並べることがいかに無粋であるか、説明するまでもないだろう。

志村はたしかにいろんな音楽を聴いていて、楽器もでき、それも三味線を弾きたいがために上妻宏光に弟子入りまでしていたという経歴はおどろきを禁じえない。だが、昭和の喜劇界とはそういう趣味人の巣窟でもあったわけで、研ナオコの言いたかったことはもっと深慮なのだろう。彼女もバラエティに根をおろしていた時期があったわけで、それに慣れ親しんだ世代からすれば、本職の歌手という肩書きには違和感すら覚える。なにより薄幸の人生をうたわせたなら右に出る者はいないだろうから。

志村が音楽からの影響とりわけリズムを身につ

け、それを芸に落とし込んでいたのはおおよそ理解できるが、むしろそれはボケ、サゲに生かそうとしていた印象がよい。

わかりやすい例が、加藤とのコントで有名なヒゲダンス。途中でハズすときのタイミングを想定して練られたものであって、リズムに乗ること(=ダンス)が目的とはなっていない。同時にここが昨今のリズムネタとの差異。ディスコ音楽のループ感から湧きおこる快楽をベースにしつつ、そこから絶妙にズレ落ちるネタに志村の意図したぬらいがあった。

ズレは笑いの基本だが、それを心地よく肉感的に伝えるにはどうすればいいか。ズレることが快楽に転化する音楽の“グルーヴ(うねり)”に着眼した志村は、そのパターンを時代相応の音楽から嗅ぎつけ血肉化、喜劇に応用した。

喜び喜ばせる劇は、人間の営みが共有される空間があるなら時と場を選ばない。ありていに言えばバラエティの真髄とはそういうことであり、芸を磨く時間は夜の帝王でもあった独身貴族にかぎりなく与えられていたことになる。そしてそこに、今回の予期せぬ罣が潜んでいた。不謹慎なのは承知のうえだが、喜劇人として大往生だったとおもう。

上妻宏光 『Newest Best - 粹Sui-』 (日本コロムビア)

和洋折衷のもと津軽三味線を次代に昇華させてきた演奏家。CMIにて師弟(トスカバラ)共演を実現させた「Paradise Has No Border」収録のベスト盤(2016年)。志村は上妻のある曲にこころを奪われ弟子入りを志願していた。「ヒゲ」のテーマは1980年、ドリフ世代にとって一家に一枚、ジャケット裏面(意匠は安斎肇)に印刷された“ヒゲ”を切り抜けば、家庭でたのしめるという代物。



掲示板

■栃木県立足利工業高校卒業生
赤坂京香さん
第8回カーデザインコンテスト
「カーデザイン賞」母校で贈呈式

公益社団法人自動車技術会が主催する『カーデザインコンテスト』は、中高校生世代を対象とし、日本のものづくり産業、自動車産業の将来を担う人材の発掘と育成を目的に行なわれている。

足利工業高校 産業デザイン科を本年3月に卒業した赤坂京香さんが、在学中「カーデザイン賞」を受賞した。テーマは「10年後の暮らしを楽しくする乗り物」。応募作品は352点、大賞に次ぐ「カーデザイン賞」はデザイン的に優れた作品に贈られる。このほど足利工業高校にて、贈呈式が行われた。

作品『Fun! mock』は、昨年度の産業デザイン科の授業60時間と自宅での作業により仕上げたとの事。「バイクのような爽快感とハンモックの心地よさを味わえ、カーシエアリングを想定したスタイリングなど、コンテストの作品の中では、一番実現の可能性が高い車だと思っています。」さらに「現状のバイクには、収納スペースがなく不便に思ったので、収納を可能にしました。」など女性らしいデザインのポイントも。

現在は東京造形大学メディアデザイン科で、コンピューターを使用して3D CAD、アニメーションなどを学んでいる。プロジェクトマッピングに興味があり、デザイナーを目指したいと将来も語ってくれた。

